

スピーキングの評価 2

注) 日本語版は、あくまでも読者の理解を容易にするためのものであり、英語による本文が正文です。日本語版は仮訳です

スピーキングの評価 2

<http://www.teachingenglish.org.uk/article/evaluating-speaking-part-2>

この記事は三部構成になっている。第1部では、話し手が話し言葉の英語を効果的なコミュニケーション手段として使うためにはどのような能力を備える必要があるかを考察した。この第2部では、こうした異なる要素を適切に評価できるのか、またその評価方法について検討する。

まず初めに、会話の評価可能な要素と不可能な、あるいは評価すべきではない要素について検討する。その後、評価の方法や様々な評価方法の機能について考える。第3部では一般的な4技能英語試験であるIELTS(アイエルツ)のスピーキングテストを分析する。

何を評価できるのか？

音韻索性

話し手は、会話(音声?)の音韻索性を、聞き手が理解できるように再現する必要があるため、この点は何らかの形で評価に含めることが基本となる。個々の音、単語や会話の中で強勢の置かれる音・置かない音、リズム、イントネーションのパターンといった要素は引き出し、特定するのが容易である。そして、これらを標準と比較しながら、理解できるかどうか、あるいはより正確に言うと一般の聞き手が理解できるかという尺度で評価することが可能だ。

言語ルール

話し手は話すときに構造、語彙、談話のルールを理解し、従えなくてはならない。この点も観察によって評価することは簡単だが、ここで留意しなければならないのは、話し手に適切なタスクと適切な文脈、例えば他の話し手のやり取りなどを設定することである。話し手を観察しながら、以下のように問うことが確認できる。

- 話し手は適切な語彙を選んでいるか。意味が通っているか。ていねいさの度合いは妥当か。語彙が他の言葉と正しく連語を成しているか。
- 話し手は文法構造に関して規則に沿っているか。
- 話し手は自分の話す内容を連結したり、他の話し手が話す内容と効果的に結び付けたりしているか。言い換えると、一貫性と結束性があるか。

パラ言語的な手段

話し手がパラ言語的な手段を理解し使えなければならないのは明白である。これはコミュニケーションの基本的な要素であり、能力にはこの手段を使いこなせることも含まれるからだ。例えばアイコンタクトと表情を使って多大な情報を伝えることができ、ジェスチャーは言語によるコミュニケーションと同じような働きをする。しかし、この分野にも問題がある。例えば、しかし、こうした機能の多くは明確に評価することが困難である。話し手が使うジェスチャー、表情、ノイズなどの口頭でのツールを観察することはできるが、標準的な正しい使い方を定めること

は可能だろうか。アイコンタクト、体や頭の動き、態度はどれも力強いメッセージを伝えるが、評価の枠組みにおいてそれをどのように記述できるだろうか。パラ言語的手段を一定の形で引き出すにはどうすればよいだろうか。さらには、テストとしてこうした分野を評価するのは適切ではなく、これに対応するには異文化コミュニケーション能力などの別の分野が最適だろうと感じるかもしれない。この場合、この分野は異なる技術を使って別途評価することになる。

コミュニケーション機能

話し手は会話のコミュニケーション機能を認識、理解し、使えなければならない。これは、語彙・文法の選択、イントネーションと強勢、音量やトーンの変化などによって話し手が本当に伝えたい内容を意味する。こうした機能は話し手のパフォーマンスを観察し、標準と比較することで評価することができる。コミュニケーション機能を評価する場合、例えば以下のように確認しながら話し手を評価することが適切である。

- 話し手は自分のメッセージが伝わりやすいイントネーションや強勢を効果的に使っているか。
- 話し手は自分のメッセージを表現するために、適切な実用的言語(具現形)を使っているか。
- 話し手はコミュニケーションを円滑にするため音量やトーンを適切に使いこなしているか。
- 話し手はコミュニケーションを円滑にするためポーズ、繰り返し、ノイズを適切に使いこなしているか。

社会的な意味合い

話者は、会話の社会的な意味合いを理解し、それを使えなければならず、その多くは正式に評価することができる。例えば、フォーマルな言葉遣いとインフォーマルな言葉遣いを使い分ける能力、直接的な表現の度合いなどを、地位や年齢などの社会的要因を再現する適切なタスクを使って評価することが可能である。会話の原則や規則に対する話し手の理解は、グループでのタスクなど他者とのやり取り(インタラクション)において観察できる。言葉のニュアンスは、語彙の使い方に対する評価に含めることができる。

評価の方法

既に述べた通り、話し言葉の大部分の要素は正式に評価することが可能だ。ここが、課題となるのは、こうした評価を可能にするテスト形式を見つけることである。効果的な評価形式であれば、場合によっては一般的な項目の下で様々な要素を分けて分析できるはずであり、それに加え話し手のコミュニケーション能力全般を評価できるタスクを使うはずである。また、当然ながら、話し手の言語を評価する場合、話し手に最善の能力を発揮してもらうために、ストレスや緊張といった感情要因による影響を減らす最善策も検討する必要がある。最後に、時間、試験官、話し手の発話を録音するのであれば機材、場所といった実務的な問題を検討する必要もある。現在様々な種類のテストや抽出法が存在している。この記事では、試験官による公式な評価に議論を限定し、例えば授業での自己評価や非公式な評価は扱わない。教師または試験官がスピーキングを公式に評価するために使う最も一般的な方法を検討する。多くのスピーキングテストは異なるタイプを混合させていることが多く、当記事の第3部(编者:今後掲載予定)でそれを検討する。

ディスカッション

受験者が試験官と会話する、または他の受験者との会話を試験官が観察する。自然な会話であるため、試験官は幅広い分野を評価する機会を得ることができる(そして受験者はリラックスして実力を出しやすい)が、この方法は実施がとても難しく、試験官による熟練を要する運用が求められる。

集団によるタスク

ディスカッション活動により焦点をあて、受験者たちに一緒に話し合っ決定に至らせるタスクをやらせる方法がある。この方法は、賛成、反対、提案などの機能に加え、順序交代などの会話の決まり事を評価するのに効果的な方法である。

プレゼンテーションと描写

受験者はあるトピックについて短いプレゼンテーションを行う、または何かを描写、説明しなければならない。試験官は聞くだけである。トピックには個人的な経験や時事問題などが含まれる。ある手順や機械を描写したり、何かのやり方についてアドバイスや指示を出したりするよう受験者に伝える。こうしたプレゼンテーションの準備のために受験者に与えられる時間は、1分から数日間までと言語上の重視する点やリソースに応じて様々である。

ロールプレイ／適切に反応する能力

受験者にある役割または状況を与え、それにふさわしい形でタスクを行ってもらう。試験官と会話する場合も、ほかの受験者と会話をしてそれを試験官が聞く場合もどちらもある。こうしたアクティビティの利点は、与えられた役割に違和感を感じることなく、良い成果を発揮する受験者がいるということだ。ただしその逆ももちろんあり得る。

面接／質疑応答

試験官が受験者に様々な質問をする。面接においては、質問は関連性のある内容で、受験者の返答に応じて変更することもできる。質疑応答では通常質問には関連性がなく、一般的により複雑で固定された内容である。面接では会話として有益なサンプルを得られる可能性が同様にある一方、質疑応答ではスピーキングの特定の側面に焦点を当てることが可能で、試験官に対する研修はあまり必要なく、採点基準に沿って評価がしやすい。

視覚的なプロンプト(手がかり)の使用

受験者に写真や図などの視覚的なプロンプトを描写するよう求める。一連の絵の比較、順序付け、結び付けを受験者にさせることで内容を発展させることもできる。この種のテストはあらゆるレベルの受験者に適しており、レベルが多岐にわたる様々な言葉に試験官が集中することができる。

ストーリーテリング

受験者は試験前に読んだり聞いたりしたストーリーを再現する、または試験官が受験者に渡したノートに基づいて再現するよう求められる。また、テスト前に読んでおくように指定したテキストの抜粋についてコメントするよう求められる場合もある。この種の評価方法は、話し言葉の英語だけでなく、情報を記憶し、組み立て、思い出す能力もテストしている。この点をどこまで重視するかは、情報を渡してからそれを再現するまでの時間と、使用する採点基準により異なる。

音読

受験者はテキストを渡されて準備するよう指示され、その後試験官に対してそれを読み上げる。この種のテストの利点は、管理がとても容易であるため、例えば最小の対(minimal pairs)や文の強勢など言語の特定のポイントに試験官が集中でき、すべての受験者が同じまたは類似のタスクに取り組むため、非常に一貫性が高いことである。欠点は、コミュニケーション能力を評価するうえで音読は現実的なタスクではなく、ネイティブ・スピーカーにとっても難しい場合があることだ。

結論

当記事の第2部では話し言葉のどの要素が評価可能で、各要素を検討する際に確認すべき内容について扱った。こうした質問はコミュニケーション能力をはかるもので、言い換えればその根底にあるのは「この話者はどのくらい高いコミュニケーション能力を持っているか」というメッセージである。また現在使われている様々な種類のテストを検討した。これらはテストの目的、受験者のタイプ、利用可能なリソースに適合させる必要がある。第

3部では、三つの公式スピーキングテストを取り上げ、それらがどのように機能するかを明らかにするとともにその効果を検討する。

著者: Paul Kaye, British Council, Syria